



促成ピーマンの仕立て方法の違いが 管理作業に及ぼす影響

表1 慣行と低位摘心栽培の違い

仕立て方法	主枝の摘心位置	一次側枝配置位置	整枝方法	収穫方法
低位摘心	100cm	通路側	上位節の側枝を寝かせて配置。 着果のない枝の間引き。 下位～中位節で受光体制の悪い二次側枝の間引き。	上位節を週3回、立ち姿勢で収穫。 下位～中位節を週1回、かがんで収穫。
慣行	140cm	うね中央側と通路側	収穫位置が高くなりすぎる枝を摘心位置付近で整枝。 一次側枝は3節まで着果させて収穫時に1節まで摘心。	上位～下位節を週3回、立ち姿勢とかがみ姿勢で収穫。



写真 慣行と低位摘心栽培の違い

表2 仕立て方法の違いが収穫や整枝時間に及ぼす影響^{z)}

仕立て方法	収穫量 ^{y)} (t/10a)	収穫時間 ^{x)}		整枝時間 ^{w)} (時間/10a)
		10aあたり (時間/10a)	kgあたり (分/kg)	
低位摘心 ^{v)}	30.1	2,366	4.7	98
慣行 ^{u)}	29.8	2,298	4.6	441

z) 定植日：2021年8月31日 品種：‘みおぎ’ 台木：‘台助’

y) 2021年10月5日～2022年6月30日の期間の収穫量。

x) 2021年11月10日～2022年6月30日の期間にkgあたり収穫時間を計測し、収穫量に乗じて10aあたり収穫時間を求めた。

w) 2021年8月31日～2022年6月10日の期間の整枝にかかる累積時間。

v) 摘心位置を100cmとした。

u) 摘心位置を140cmとした。

高知県の促成ピーマン栽培では、主枝を130～150cm程度で摘心する仕立て方法が一般的ですが、この方法では春先以降に収穫位置が高くなり、作業負担が大きくなってしまいます。

そこで、センターニュース第101号にて紹介した低位摘心栽培について、収穫や整枝の作業性を調べました。

低位摘心栽培では、主枝の摘心位置を100cm程度とすることで、樹高が130cm程度に収まり、腕を高い位置に上げずに整枝作業が可能になります(写真)。また、全ての側枝が通路側に配置されるため、体に近い位置で収穫作業ができます(表1)。

さらなる収穫労力の軽減のため、低位摘心栽培では、立ち姿勢で作業する上位節の収穫を週3回、かがんだ姿勢で作業する中

位～下位節の収穫を週1回としました(表1)。これらの方法により、収穫量は30.1t/10a、収穫時間は2,366時間/10aで、慣行栽培と大きな違いはありませんでしたが、整枝時間は98時間/10aで慣行栽培の1/4程度となりました(表2)。

収穫作業が楽であること、整枝に係る労力が少なく比較的容易であることから、大規模経営などの雇用者に作業を任せる経営体での活用が期待されます。

本研究は、内閣府地方大学・地域産業創生交付金「“IoP(Internet of Plants)”が導く「Next次世代型施設園芸農業」への進化」により実施しました。

(先端生産システム担当 谷内 弘道

088-863-4918)